

News Letter

■ 特集記事 1
日本演劇・東洋演劇研究コース：
「GCOE演劇講座 上海演劇の精華」

■ 特集記事 2
日本演劇・東洋演劇研究コース：
「国際ラウンドテーブル
上海都市空間の中の演劇・映像」

演劇・映像の国際的教育研究拠点



■ 活動報告	
● 西洋演劇研究コース	P3
● 東洋演劇研究コース	P4
● 日本演劇研究コース	
● 舞踊研究コース	P5
● 映像研究コース	P6
● 芸術文化環境研究コース	P6
■ 新刊紹介	P7~8
■ イベントカレンダー 編集後記	P8

特集記事 ① 報告

日本演劇・東洋演劇研究コース： 「演劇講座・上海演劇の精華」

2009年6月1日(月)14:45~18:00 早稲田キャンパス小野記念講堂

講師：羅懷臻(脚本家、上海市脚本創作センター)

「中国演劇における「海派精神」—上海演劇百年の回顧」

講師：金静(越劇俳優、戚派継承者、上海静安越劇団)

「戚派芸術と越劇の魅力」

講師：陳少雲(京劇俳優、麒派継承者、上海京劇院)

「麒派芸術と中国演劇の魅力」

上海万博を翌年に控え、上海に対する世界の関心は更に高まりつつある。現在上海には現代劇の「話劇」や喜劇の「滑稽戲」を始め、「京劇」「昆劇」「越劇」「滬劇」「淮劇」各劇の職業劇団が活動中で、何れの劇団も全国トップクラスの規模と実力を有している。本グローバル COE では日本演劇研究コースと東洋演劇研究コースの共催にて、上海演劇の100年にわたる歴史を回顧し、現状を紹介することを企図して、現在の上海演劇界を代表する3名の演劇人を講師に招く「演劇講座・上海演劇の精華」を開催した。

第一部の講師・羅懷臻氏は脚本家として「伝統劇の近代化」と「地方劇の都市化」を1990年代より提唱しており、淮劇『金龍と蜚蜉』(上海淮劇団・1993年)や昆劇『班昭』(上海昆劇団・2001年)はそれが具現化された作品、上海演劇の新たな代表作として広く認められている。講演では、同じく中国を代表する大都市北京とその歴史的背景、及び演劇関係者や観客の嗜好の違いを比較しつつ、上海文化・上海演劇

の特徴を、伝統に立脚しながらも、国内の各地及び海外から流入し続ける新しい人材や文化・芸術を広く吸収することによって常に変化し、新しいものを創り続けることにありと定義された。

羅懷臻氏の講演を通じ上海演劇の歴史と現状に対する全般的理解が得られた後、第二部では京劇と越劇という現在の上海演劇界で人気を二分する各劇から、それぞれ代表的流派を継承する現役の俳優お二人にお話頂いた。

まず戚雅仙が創始した越劇戚派の継承者である金静氏には、戚派代表作『血手印』と新作越劇版『牡丹亭』の一部の映像を紹介頂き、更に越劇のメロディーの中から、剛健さや清新さを表現するものの代表例として呂派『穆桂英掛帥』の一節を、悲しみを表現するものの代表例として戚派『白蛇伝』の一節を、それぞれアカベラにて披露して頂いた。

もう一つ周信芳が創始した上海京劇を代表する流派、麒派の継承者である陳少雲氏は麒派の芸術が中国全土の京劇界のみならず映画界を始め文化界全体に及ぼした影響に触れた後で、歌唱、台詞回し、しぐさの各側面から麒派の代表作を紹介された。中でも、しぐさでのみにて置き忘れた手紙を探しに焦って家に戻る宋江の様子を壇上にて演じて下さった『水滸伝』の一節は、麒派芸術の真髄を目の当たりにでき、得難い機会となった。
(研究助手 森平崇文)



特集記事 ② 日本演劇・東洋演劇研究コース：

国際ラウンドテーブル「上海都市空間の中の演劇・映像」

2009年6月6日(土)10:00～17:20 早稲田キャンパス 26号館 302

第一部「1940年代を中心に」

問題提起：羅蘇文(上海社会科学院)

パネリスト：姜進(華東師範大学)、連玲玲(中央研究院)、
邵迎建(徳島大学)、張新民(大阪市大)、
白井啓介(文教大学)、藤野真子(関西学院大学・
研究協力者)、三須祐介(広島経済大学・研究協
力者)、高橋俊(高知大学)

司会：森平崇文(早稲田大学・研究助手)

第二部「1950年代を中心に」

問題提起：姜進(華東師範大学)

パネリスト：羅蘇文(上海社会科学院)、連玲玲(中央研究院)、
邵迎建(徳島大学)、張新民(大阪市大)、佐治俊彦
(和光大学)、村井寛志(神奈川大学)、阿部範之
(同志社大学)、森平崇文(早稲田大学・研究助手)

司会：平林宣和(早稲田大学・事業推進担当者)

第三部「総合討論」

司会：岡崎由美(早稲田大学・事業推進担当者)

上海の演劇と映像を研究対象とする研究者が一堂に会し、テーマを設定して徹底的に議論し意見を交換する。今回の国際ラウンドテーブルはこのようなコンセプトを基に、日本演劇研究コースと東洋演劇研究コースの共催にて中国から2名、台湾から1名、国内から9名の研究者を招聘して開催された。参加者の内訳は、映像から3名、演劇から8名(話劇1名、京劇2名、越劇2名、滬劇1名、淮劇1名、滑稽戯1名)、更にメディアと都市文化の分野から3名の、計14名である。上海という都市に特化して演劇と映像の研究者がこれ程結集した研究集会は国内外を問わず例を見ない。上海の現在まで存続する各劇がそれぞれ舞台芸術として大きく発展した1940年代を第一部の、中華人民共和国以降の各劇・映像の代表作が陸続と発表された1950年代を第二部の、それぞれテーマに設定した。この1940年代と1950年代は現在、再評価の可能性が高いとして、世界中の上海史研究者から熱い視線が注がれている研究分野でもある。

第一部の問題提起「国際化と土着化の交差—1940年代上海における近代娯楽市場」において羅蘇文氏は、1940年代をこれまでの上海史研究において断絶が見られる1920～1930年代と1950年代をつなぐ、鍵となる時期と位置付けた後で、国内外の映画産業と作



品が1930～1940年代における上海のメディア及び伝統劇を含む演劇全体を牽引してきた点を多数のデータを基に論証された。引き続き、問題提起を受けての討論では、政治史による評価を括弧付きにして1940年代上海の演劇と映像を再定位することの重要性が確認された。

第二部の問題提起「1950年代上海における都市娯楽と政治」において姜進氏は、社会全体に大変革がもたらされた1950年代においても、都市の工業化と女性化は途切れることなく進展していたことを、同時期の娯楽業界にて市場原理が一定程度機能していた点を提示することにより強調された。また上海は中国で唯一の国際都市であり、国内の他の大都市よりパリやニューヨークといった都市と比較して論じるべきであると提起された。

その後の討論においてパネリストから、1950年代の上海映画界はアメリカ映画の上映が途絶えるという一大転機に直面しており、演劇と同じ文脈で論じることが難しい、などの意見が出された。



第三部の、これまでの議論を踏まえて全パネリストが参加した総合討論では、司会者によって提示された「観客」をキーワードに約1時間にわたり議論が展開された。



途中休憩を挟み全5時間に及んだラウンドテーブルにおいて、各パネリストから示唆に富む多くの問題が提起され、1940年代と1950年代の演劇や映像を通じた上海都市文化研究の可能性と意義について、参加者の間に共通認識を得ることができたのは今回の大きな成果と言える。今後、今回のパネリストを中心にした共同研究を何らかの形にて継続させていきたい。
(研究助手 森平崇文)

西洋演劇研究コース

活 動 報 告

■演劇論講座

日時：2009年5月27日(水)17:00～19:00
 演題：現代ドイツ演劇におけるゲーテ『ファウスト』演出
 場所：大隈記念タワー(26号館) 地下1階多目的講義室
 講師：ハンス＝ペーター・バイアーデルファー氏 Prof. Dr.
 Hans-Peter Bayerdörfer (ミュンヘン大学教授)
 通訳：長谷川悦朗(GCOE研究協力者)
 ゲーテ『ファウスト』の上演史から、ペーター・シュタイ
 ンとミヒャエル・タールハイマーによる演出を取り上げ、
 老学者の「若返り」の場面を比較分析し、両者の構想につ
 て、貴重な映像を交えてお話いただいた。
 日時：2009年6月10日(水) 15:00～18:00
 演題：伝統と革新—演劇人メイエルホリドの軌跡
 場所：大隈記念タワー(26号館)3階302会議室
 講師：ベアトリス・ピコン＝ヴァラン氏(フランス国立科学
 研究所・演劇博物館上級研究員)
 通訳：藤井慎太郎(GCOE事業推進担当者・文学学術院准教授)
 20世紀初頭のロシア演劇において、演出の重要性を打ち
 出したメイエルホリドの革新性を論じつつ、その生涯や人
 となりも貴重な映像とともにお話しいただいた。

■博士論文経過報告会

日時：2009年6月20日(土) 14:00～17:00
 場所：6号館318教室(レクチャールーム)
 発表者：片岡 昇(GCOE研究員)
 「サミュエル・ベケットの後期戯曲における幾何学
 的構造の分析」
 本多 まりえ(GCOE研究員)
 “Henry Chettle: Jack of All Trades”
 今回の報告会では、ベケットゼミ(岡室)に所属する片岡氏
 と、シェイクスピアゼミ(冬木・本山)に所属する本多氏が、
 それぞれの博士論文の執筆状況と今後の展望について、発
 表を行った。事業推進担当者からの助言や、GCOE研究員か
 らの質問など、それぞれの発表について活発な議論があった。

■ベケット・ゼミ

事業推進担当者岡室美奈子とベケット・ゼミに所属する
 GCOE研究員の景英淑、片岡昇、久米宗隆が、演出家、俳優
 とワークショップ形式でベケットの戯曲『幽霊三重奏(Ghost
 Trio)』と『あたしじゃないし、(Not I)』の翻訳上演本作成を
 行った。この2作品は、6月12日～14日に中野テルブシコー
 ルで上演された。また、上演後、精神科医の斎藤環氏や劇作
 家の佐藤信氏、映像作家の中島崇氏らと討議を行った。

■「オペラ／音楽劇の総合的研究」プロジェクト (通称：オペラ研究会)

今年度のオペラ研究会には新規会員も加わり、以下に記
 す月例研究会で活発な議論が行われている。
 日時：2009年4月17日(金)18:15～20:30
 題目：1. 「オペラ研究」の枠組みと今後の課題—音楽学・劇
 場史の観点から 2. オペラ観劇の「仕組み」— 18世
 紀末から19世紀にかけてのナポリの諸劇場のチケッ
 ト代金、および観客を例として
 場所：8号館406教室
 発表者：山田高誌(GCOE研究員)
 日時：2009年5月19日(火)18:15～20:30
 題目：ヒンデミット《行きと帰り》における「時間」と「物語」
 についての考察
 場所：8号館307教室
 発表者：中村仁(GCOE研究員)
 日時：2009年6月23日(火)18:15～20:30
 内容：GCOE研究員による研究報告会
 場所：8号館307教室

■第1回 アイルランド演劇研究会

日時：2009年4月18日(土)15:00～18:00
 場所：11号館1424共同研究室
 本年度より活動を開始したアイルランド演劇研究会の
 第1回を開催した。今回は、Patricia Burke Broganの
Eclipsed(1988)と同年に執筆された、Brian Frielの*Making
 History*とFrank McGuinnessの*Carthaginians*について分析
 し、1980年代後半のアイルランドという時代のコンテクス
 トについて考察した。

■17世紀フランス演劇研究会

17世紀フランス演劇研究会では、現代における研究と実
 践が明らかにしてきた古典主義演劇の意義について下記の
 講演会を行った。
 日時：2009年6月24日(水)18:00～21:00
 題目：17世紀演劇の現代性
 会場：26号館(大隈記念タワー)3階302会議室
 講師：クリスティアン・ビエ氏(パリ第10大学)
 クリストフ・トリオー氏(パリ第7大学)
 モデレーター：千川哲生(GCOE研究員)

■フランス語圏舞台芸術研究プロジェクト

ベアトリス・ピコン＝ヴァラン先生を演劇博物館上級研
 究員としてお招きし、「演出の20世紀」をテーマに以下の日
 程により連続講義(フランス語)を開講した。
 第1回 2009年5月12日(火)18:00～21:00
 第2回 2009年5月19日(火)18:00～21:00
 第3回 2009年5月26日(火)18:00～21:00
 第4回 2009年6月2日(火)18:00～21:00
 第5回 2009年6月9日(火)18:00～21:00
 会場：大隈タワー 3階301会議室(第2回のみ14号館8階
 803会議室)
 ピコン＝ヴァラン先生は、ロシア語も堪能であることから、
 メイエルホリドとロシア現代演劇に関するセミナー(ロシア
 語)を以下の日程で行った。

第1回 2009年5月27日(水)18:00～21:00
 第2回 2009年6月17日(水)18:00～21:00
 第3回 2009年7月1日(水)18:00～21:00
 会場：国際会議場 第6会議室(第1回)、第7会議室(第2、3回)
 また、芸術文化環境コースとの共催により、昨年度に出版
 された『演劇学の教科書』(7頁に新刊紹介を掲載)の著者を
 お招きし、以下の日程の講演会を行った。
 日時：2009年6月22日(月)18:00～21:00
 題目：「演劇の場 その政治的、社会的、美学的意味」
 会場：6号館3階318(演劇博物館レクチャールーム)
 講師：クリスティアン・ビエ氏(パリ第10大学)
 クリストフ・トリオー氏(パリ第7大学)
 エマニュエル・ヴァロン氏(パリ第10大学)
 モデレーター：藤井慎太郎(GCOE事業推進担当者)

日時：2009年6月23日(火)19:00～21:00
 題目：「政治の上演 表象の政治学」
 会場：東京日仏学院 エスパス・イマージュ
 講師：上記の三氏
 モデレーター：松井憲太郎(GCOE客員講師)
 言語：フランス語・日本語 日本語同時通訳つき

日時：2009年6月25日(木)18:00～21:00
 題目：「ヨーロッパの文化政策—リスボン戦略における創造
 性と文化産業の問題を中心に」
 会場：国際会議場 共同研究室7
 講師：エマニュエル・ヴァロン氏(パリ第10大学)
 (研究助手 鈴木辰一・村瀬民子)

東洋演劇研究コース

活 動 報 告

東洋演劇研究コースでは、2009年度第1回と第2回の共同ゼミ、並びに2009年2月と5月に、台湾の中央研究院中国文哲研究所からそれぞれ講師を招聘して開催した特別講義について報告する。

■共同ゼミ（会場は何れも早稲田キャンパス6号館318室）

第1回 2009年4月18日（土）16:00～18:00

発表者：陳凌虹（GCOE研究員・総合研究大学院）

「『椿姫』『茶花女』『新茶花』一日中における演劇『椿姫』の上演とその意味」

呉孟晋（GCOE研究員・東大院）

「民国期における画家による演劇への関与について」

第2回 2009年5月16日（土）13:30～15:30

発表者：黄綿史（GCOE研究員・一橋大院）

「越劇と黄梅戯におけるジェンダー—『梁山伯と祝英台』の比較を通して」

魏名婕（GCOE研究員）

「『The Bondman』上演について—ロンドン、東京そして上海」

東洋演劇研究コースではコース所属の研究員に、博士論文の構想と進捗状況、並びに最新の研究成果を発表してもらう共同ゼミを開催している。昨年度は全5回で計7名の研究員が発表した。今年度の第1回と第2回で、昨年度採用の全ての研究員の発表を終えたことになる。第3回からは、今年度より採用の研究員に発表の場を提供していく予定である。

■特別講義

日時：2009年2月28日（土）15:00～17:00

会場：早稲田キャンパス国際会議場共同研究室6

講師：王璦玲（中央研究院中国文哲研究所副所長）

「湯頭祖の劇作と劇評における情、理、勢」

湯頭祖は明代の劇作家で、その代表作『牡丹亭』は現在で

も昆劇などで上演されることも多い。本講義では『牡丹亭』『驚夢』の場面を、彼の劇作・劇評論における「情」「理」「勢」の言説を通じて分析された。中国演劇論のキーワードである「情」と「理」に、新たに「勢」を加えた分析に、参加者一同多いに啓発された。

日時：2009年5月16日（土）15:50～17:50

会場：早稲田キャンパス6号館318室

講師：胡曉真（中央研究院中国文哲研究所研究員）

「20世紀初頭の中国における“閨秀文芸”の変遷—女性彈詞小説を例に」

彈詞は中国江南地方を代表する語り物芸能の一つである。清代、その表現形式を用いた「彈詞小説」と呼ばれる小説の作者に、教養ある女性たちが含まれていた。本講義では、姜映清という女流彈詞小説作家をとり上げ、清末民初期における上海の新聞界や出版界、彈詞小説の担い手や読者層の変遷などにつき、多くの一次資料を紹介しながら講義された。



（研究助手 森平崇文）

日本演劇研究コース

■石川県白山市深瀬でくまわし探訪録

深瀬でくまわしは、旧尾口村深瀬という集落で行われていた古浄瑠璃系の人形芸だが、ダム建設で立ち退きを余儀なくされ、比較的まとまって移住した鶴来町深瀬新町を拠点として、かつての集落の人々を中心に伝承されている。2005年に合併して白山市となった。

2009年2月22日、ひさびさに深瀬でくまわし保存会館を訪れ、早稲田大学から来たと告げたとたん、以前すごい女の先生が来たことがあるという返事がかえってきた。いうまでもなく、内山先生のことである。その時、私ばかりでなく、故時松孝文氏（近松研究所）をはじめ、4・5人同行していたはずなのだが、まったくご記憶にない様子だった。宜なるかな。前回は1993年2月21日の訪問だった。

2月末の土・日曜の2日間行われていた上演も、今は日曜のみになった。地方の衰退は止まるところを知らない。座員の減少や練習の停滞もさることながら、観客がめっきり減った。しかし、新しい参加者もあるという。何とか継承に努力していただきたい。（事業推進担当者 和田修）

■講演会「越前風」の伝承について

2009年2月24日（火）13:00～15:30

戸山キャンパス39号館第5会議室

人形浄瑠璃文楽コース研究会では、文楽の豊竹英大夫師をお招きして、特別研究会「越前風」の伝承について（昨年3月24日に続く2回目）を開催した。

越前風とは、義太夫節浄瑠璃で、豊竹越前少掾（1681～1764）が初演した曲に特徴的な語り口を指す。研究会では、越前風の代表的な基準曲とされる元文元年（1736）初演「和田合戦女舞鶴」市若初陣の段を題材に取り上げ、英大夫



舞踊研究コース

活 動 報 告

舞踊研究コースでは、平成21年度の現代舞踊プロジェクトとして20世紀舞踊を代表するスティーヴ・パクストン氏を迎えレクチャーとデモンストレーションを行った(2009年5月21日(木)18:00~21:00、早稲田大学国際会議場第2会議室)

1960年代初め、舞踊の世界にまったく新しい流れをもたらす二つの動きが太平洋を挟んで起こっていた。ひとつが土方巽を始祖とする日本の暗黒舞踏、もうひとつがニューヨークのジャドソン派と呼ばれる一部の舞踊家たちによる実験的な活動である。後者は後にポスト・モダンダンス(以下、PMDと略す)として知られるようになり、イサドラ・ダンカンに始まるモダンダンスの潮流を大きく方向転換することになる。しかし、舞踏が70年代末のパリ公演を嚆矢として欧米のみならず南米を含めた世界中に広まっていったのに比べると、PMDは、あれ程の前衛性や実験性を有していながら、80年前後からヨーロッパに舞踊界の潮流が移行するにつれ、次第に影が薄くなっていった。厚木凡人、ケイタケイ、菊池純子、黒沢美香などの一部の舞踊家を除くと、日本の舞踊界がPMDにしっかりと向き合うということもほとんどなかった。

しかし、最近になり多少の変化がある。舞踊学会がPMD特集したり、PMDの中心人物トリシャ・ブラウンが久々に来日したり、またPMDの時代を知らない若手の研究者にこれをテーマにする者が出てきている。その意味で、トリシャと並んでPMDでもっとも重要な舞踊家であるスティーヴ・パクストンが、1975年の東京公演以来34年ぶりに来日したのも、おおいに時宜にかなったものだ。これは、決して遅きに失したことにはならないはずである。

また、パクストンはたんにPMDの担い手のひとりというばかりでなく、コンタクト・インプロヴィゼーションの創始者として世界の舞踊界にあまねく知られ、その意味でも彼の言葉に直接耳を傾けたい者が日本に少なくないだろう。

早稲田大学でのパクストンは、ダンカン、グレアム、カニングハムなどのアメリカの舞踊界の流れについて話し、ジョ



ン・ケージについても触れながら、PMD、そしてコンタクト・インプロヴィゼーションの話になりかけたところで、前半が終了してしまっただけでなく、講演もインプロヴィゼーションが彼の本領のようだった。後半は私との対談というかたちを取り、PMDのこと、コンタクト・インプロヴィゼーションが生まれた時代の背景、そして、1980年代後半になってその発展形として彼自身が開発したメソッド「material for the spine」などについて、私がパクストンに問いかけながら進行した。

1964年のカニングハム舞踊団の一員として来日した時、初めて合気道との出会いがあったこと、合気道と出会っていなかったらコンタクト・インプロヴィゼーションは生まれなかったことなどの、パクストン自身からの貴重な証言があった。カニングハム舞踊団の一員としてやっていた体の動きを、彼が机に飛び乗って実演してみせた時には、会場が沸いた。また、恐らく彼が50代のころのものと思われる映像を流したときには、自然で端正、銜いのない動きには皆見入ってしまった。コンテンポラリーダンスとして今見ても、決して古くはない。事実、PMDにはコンテンポラリーダンスを先取りしている実験性がいくつもあつた。最後の質疑応答もかなり活発に行われ、パクストンはひとつひとつの質問に辛抱強く丁寧に答えてくれた。彼に疲労がたまっていないかとこちらが心配するほどだった。

新しいメソッド「material for the spine」についてそれ程聞けなかったのは残念だが、彼にしてみれば、来日してそれまでさんざんそのワークショップをしてきたということもあるだろう。いずれにしろ、20世紀の舞踊史を代表する歴史的な人物の一人スティーヴ・パクストンの早稲田大学での講演は、演劇博物館の歴史にも一駒を記すに違いない。

(GCOE客員講師 石井 達朗)

活 動 報 告

師の祖父にあたる豊竹若大夫の演奏を聞きながら、お話をうかがった。

なお、英大夫師には、本年10月1日の公開講座「浄瑠璃」で、この市若初陣の段を語って頂けることとなった。文楽でも1989年9月以来上演されていない。それだけに、極めて意義深い素浄瑠璃公演になるものと考えている。

(GCOE客員講師 飯島満)

■能楽学会第8回大会にて大会企画「世阿弥発見百年—吉田東伍の人と学問—」を共催

2009年3月21日(土) 早稲田大学 井深大記念ホール

今年は、歴史学者・吉田東伍が世阿弥能楽論を「発見」し、

『世阿弥十六部集』(明治42[1909]年)を刊行してから百年という節目の年である。グローバルCOEでは能楽学会と共催で関連企画を開催した。ここでは竹本幹夫抛点リーダーが、吉田文庫から発見された『三道』の影写本(原本は関東大震災で焼失)について講演。影写本にある吉田東伍の書き入れによって、『世阿弥十六部集』の校訂態度の問題点が明らかになると指摘した。これは、日本演劇研究コースにおいて、新潟の吉田文庫で実施してきた吉田東伍遺筆の調査・整理の成果に基づくものである。他に、表章氏の世阿弥能楽論研究史について、千田稔氏の吉田東伍の人生と業績についての講演があった。

(演劇博物館助手・GCOE研究員 中尾薫)

映像研究コース

2009年4月にスタートした新年度の活動も2カ月が経過している。この期間、映像研究コース(映画史)では、11月開催予定の国際研究集会に向けて、可燃性フィルムの復元を行っている。今回復元作業をしているフィルムには、日露戦争映画や1910年代以前に撮影された日本の映像が含まれている。復元と言っても、今年度の予算の関係で、可燃性フィルムから直接デジタル映像を作るという作業をしているため、フィルム自体の復元は来年度以降にできれば行いたい。

中国プロジェクトでは山本律研究員が、これまでの調査をまとめた論文を完成し、その英語版が事業推進担当者小松弘の論文と共に、アメリカで出版されるアジアにおける初期映画に関する論文集に掲載されることになった。これまで我々の行ってきた調査が、諸外国の研究者に発信されるよい機会を得たと思っている。

1910年代の映画研究に関しては、これまで購入したフィルムを中心として分析が続けられている。6月末から7月上旬にかけてイタリアのボローニャ市で行われる映画祭で、演劇博物館所蔵の『朝顔日記』が上映されることになり、これを機会に日本とヨーロッパの1910年代の映画の比較検討が実証的研究として行われることになった。明治時代に世界の各都市の映画館で組まれた上映プログラムを再現して、様々な国の映画を共時的に捉えようとする研究である。ボローニャ市シネマテークにおけるこの試みは、来年度も継続して行われる予定である。

さらに、映像研究コースでは、モンテリオール大学教授のアンドレ・ゴドロー氏をお招きして、5月23日(土)にゴドロー氏の講演会を開催した。題目は“New Perspectives on the Moving Image at the Turn of the 20th Century”という

もので、この題目自体と同様に講演の内容自体も、映画という言葉の両義性に関する問題を扱う、非常に興味深いものであった。この題目の‘at the Turn of the 20th Century’は、日本語にすると「20世紀の変わり目における」ということだが、それは19世紀から20世紀への変わり目と、20世紀から21世紀への変わり目の両方を指し示していることが、ゴドロー氏の話から理解された。ゴドロー氏は19世紀末の、いわゆる「初期の映画」の専門家として世界的に著名な方だが、今回の講演では話の展開を19世紀末/20世紀初めから一気に20世紀末/21世紀初めに飛躍させる。われわれはタイムマシンに乗って100年の時間を飛び越える。ゴドロー先生の基本的な考え方は、映画なる概念は大体が両義的で曖昧模糊としている、というものだ。例えば映画はその呼び名を初めから数多く持った。シネマトグラフ、シネマ、フィルム、モーション・ピクチャ、ムーヴィング・ピクチャ、ムーヴィーなどなど、ある特定の時代、ある社会的階層に応じて、映画はその呼び名を変えてきた。また映画が上映される場所も100年の中で変化し続けた。その変動は現在でも引き続けている。21世紀の初期である現在は明らかに20年前とは異なった映画の概念が発生している。たとえば、ダンスや演劇のプレミア上演が映像を通じて映画館で行われる(パリやモンテリオールで起きている現象)というのもその一つである。歴史をトータルに眺めた時、それは現在から見るというひとつのパースペクティブをもったものでもよいのだが、われわれは映画を単一の現象として捉えるという認識方法それ自体を回避すべきなのだろう。講演の後、参加者との活発な意見交換が行われた。

(事業推進担当者 小松弘)

芸術文化環境研究コース

■ F/Tユニバーシティ開催

Vol.1 2009年3月1日(日)13:00～15:30

講師：ヘルガルド・ハウグ、ダニエル・ヴェツェル(リミニプロトコル)

ナビゲーター：萩原健(明治大学専任講師)

Vol.2 2009年3月12日(木)15:00～17:30

講師：ロメオ・カステルッチ(ソチエタス・ラファエロ・サンツィオ)

ナビゲーター：藤井慎太郎(事業推進担当者)

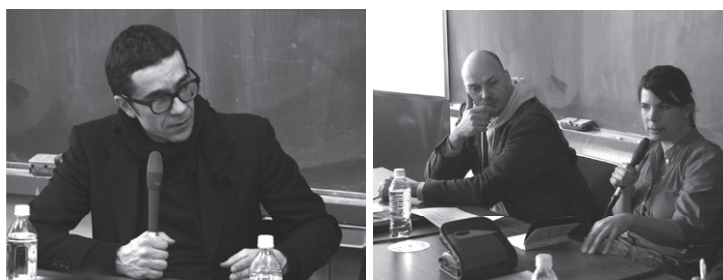
いずれも会場は、にしすがも創造舎

F/Tユニバーシティは、早稲田大学GCOEと、筆者がプログラム・ディレクターを務めるフェスティバル/トーキョー(以下F/Tと略)との連携のもと、2007年度より実施されているレクチャー・シリーズである。F/Tが招聘する世界アーティストをゲスト講師として迎え、また日本人の専門家にナビゲーターを依頼。通常のポストトークでは時間的制約のため深めることの難しい、アーティストの根本的な問題意識から作品創造のプロセスまでを詳しく解きほぐしていくことを目的としている。

初回となった2008年3月には、ドキュメンタリー演劇の手法で爆発的人气を誇るリミニ・プロトコルのメンバー、シュテファン・ケーギ(スイス)と、スペイン語圏演劇の牽引者であり続けるアルゼンチンの演出

家ダニエル・ベロネッセを迎えた。また東京国際芸術祭からフェスティバル/トーキョーと名称が改められ、開催の枠組が大きく拡大した2009年3月のフェスティバルでは、同じくリミニ・プロトコルのメンバーで『資本論』など政治性の強い素材を扱うダニエル・ヴェツェルとヘルガルド・ハウグ(ドイツ)、そしてイメージと象徴の演劇によって世界を席卷するイタリアの異才、ロメオ・カステルッチが招かれた。

上記4名のアーティストたちはいずれも、世界の主要なフェスティバルや劇場で途切れることなく作品を発表し続けている最先鋭の創り手たちであり、フェスティバルという枠組がなければ来日する時間さえ確保が難しい人気作家たちであるが、このF/Tユニバーシティによって、作品上演のみならず、創作



の原点、それを支える思想や活動の経緯、各プロジェクトの挑戦などについて、日本語通訳つきで3時間、豊富な映像や参考資料をアーティスト自身の解説つきオペレーションで伺うことができたことは、モチベーションの高い参加者にとって非常に貴重な機会となったのではないだろうか。

いずれの回も廃校中学校の校舎を転用した創造拠点「にしがも創造舎」の普通教室を会場として利用したことも手伝って、参加者は空間的にも心理的にも近い距離感でアーティストと密度の濃い講義に聞き入り、また盛んに質問を投げかけていた。事前予約で集まった40名程度の参加者は、早稲田大学

GCOE関係者および研究者に加え、プレス関係者や熱心な演劇ファン、若手アーティストなどで、本事業に対する関心の高さが伺えた。なお、本事業はF/T開催に合わせて今後も定期的の実施していく予定であり、終年度には、実施された全レクチャーをまとめた書籍の出版を計画している。今後も、世界最先端のクリエーションと日本の演劇シーンをつなぐフェスティバルとして、作品上演のみならず作品・作家研究という観点からも、意義ある機会を提供していくことができれば幸いである。

(GCOE客員講師 相馬千秋)

『演劇学の教科書』刊行に対する謝辞

拠点リーダー 竹本幹夫

本拠点は今年で発足三年目となり、中間評価の年を迎える。過去2年間の成果の全体は、21世紀COEの5年間の通算成果にほぼ匹敵する。とくに研究協力者を監修に迎えての翻訳書『演劇学の教科書』のあることは、従来にない新機軸の一つである。これは海外の最新の研究成果を紹介することの意義を認めての出版である。西洋演劇コースの共同研究の成果であるが、総監修の重責を担われて多数の翻訳チームを率いられた、学習院大学教授の佐伯隆幸先生には深甚の謝意を表したい。運営役の藤井慎太郎准教授が在外研究で渡仏中に、国内にあって膨大な翻訳を短期間でまとめ上げられたご尽力には、お礼の言葉もない。また佐伯先生の指導下で困難な作業に当たられた翻訳担当委員の各位にもあつく御礼申し上げたい。関連する研究協力者・研究員の総力を結集した成果であり、こうした広汎な基盤の上に行われる事業が、今後も続くことを念じている。

新刊紹介

『演劇学の教科書』 クリスティアン・ビエ、クリストフ・トリオー著
日本語版監修：佐伯隆幸(学習院大学教授)
国書刊行会 2009年3月

本書は、グローバルCOE フランス語圏舞台美術研究プロジェクトにおいて、ときに著者をフランスから招聘しながら研究会を開催し、原著の理解を深めながら、協同して翻訳作業を進めた成果である。西洋演劇について、歴史的に、理論的に、実践的に深く学ぶための必読文献としてお勧めしたい。

(事業推進担当者 藤井慎太郎)



『オペラ学の地平』 丸本隆、伊藤直子、長谷川悦朗、福中冬子、森佳子編 彩流社 2009年3月

明治36年の東京音楽学校による《オルフェウス》日本初演以来、オペラ文化は瞬間に日本人の間に浸透した。今やオペラは輸入文化ではなく、我が国のものとなって久しい。しかしながら日本において「オペラ研究」と言えば、文化政策の一環としての「製作」および「実演」に比重があり、いわゆる学術的な対象として包括的に扱われるケースはまだ多くない。

オペラを学術的に扱うには演劇学と音楽学だけでなく、政治、社会学、文学、思想、歴史などの領域からの多角的かつ重層的な研究が必要である。本書においてはそれを実現することを目的に、さまざまな執筆者が自身の専門からオペラとの関わりをパースペクティブに捉え、ユニークに論じている。

現在、世界的な経済危機とともに、「瀟洒」なオペラ文化は冬の時代を迎えている。だからこそ今、「オペラとは何か」について模索することが求められるのではないか。そのような意味で、本書が日本のオペラ学「事始め」としてのきっかけを与えることが出来れば幸いである。

(GCOE研究員 森佳子)



『論争家コルネイユ—フランス古典悲劇と演劇理論』 千川哲生著 早稲田大学出版部 2009年3月

17世紀フランスの劇作家ピエール・コルネイユの悲劇と演劇理論の総合的な解明を目指した本書は、この作家の細心で大胆な論争家としての一面を鮮やかに浮彫りにする。コルネイユは「ル・シッド論争」をきっかけとして演劇に関する考察を深め、独自の理論を構築するに至った。自作の正当化と批判に対する反論がその主な動機である。一方で『オラース』や『シンナ』に代表されるコルネイユの悲劇の原動力は、登場人物が論理的な言葉を駆使しながら互いを論破しようとする試みにある。様々な論証の技法は、コルネイユの劇理論と悲劇、双方の形成に大きく関わっているばかりか、両者を結びつけてもいる。本書はこの点に着目することで、コルネイユがバロック期から古典主義期にかけて、理論と実践を関連させながら試行錯誤のなかで創作を続けたことを詳細に跡付けている。なお、本書は2007年にパリ第四大学に提出された筆者の博士号請求論文の邦訳である。

(GCOE研究員 千川哲生)



『「一谷嫩軍記」の歴史的 research 歌舞伎・上演と演出』李墨著 ペリかん社 2009年3月

『「一谷嫩軍記」の歴史的 research 歌舞伎・上演と演出』は、早稲田大学演劇博物館グローバルCOEより刊行される学位論文の公刊事業の第一回目の一冊となる。

本書は、人形浄瑠璃から歌舞伎に移入され、250年あまりの上演史を持つ、日本演劇史上の屈指の名作「一谷嫩軍記」の上演と演出を扱ったものである。

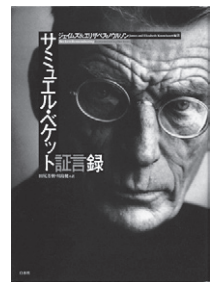
人形浄瑠璃という先輩演劇の成果を受け、歌舞伎はその文学性、演劇手法を取り入れることのみならず、興行ごとに工夫を重ね、生身の俳優による独自の表現を獲得するに至る。こういった歌舞伎の独自性を捉え、義太夫狂言の一作品の上演・演出の歴史的変遷を分析したのは本書である。本書は可能な限り文献資料や絵画資料を博捜し、宝暦2年の初演より明治36年現行演出の成立までの上演史・演出の変遷を再構築した。特徴となる点は二つにある。まず、各時代における膨大な資料を網羅的に調査し、台本、評判記、番付、演劇書など性質の異なる資料を読みぬき、綿密に各時代における歌舞伎独自の工夫・演出を分析したことにある。次に、文献研究のみならず、初演以来熊谷を手掛けた歌舞伎の代表的な役者に焦点を当て、それぞれの演出を克明に書き記したことにある。

本書は歌舞伎作品研究における最新成果の一つであり、今後の歌舞伎作品研究、義太夫狂言研究に大きく寄与するものとなる。
(研究協力者 李墨)



『ベケット証言録』ジェイムズ&エリザベス・ノウルソン著 田尻芳樹・川島健翻訳 白水社 2008年12月

数々の貴重な写真とともにサミュエル・ベケットにまつわる「記憶」を、ベケット本人とその知人の証言をもとによりみがえらせたのがこの本である。第1部では、ジェイムズ・ノウルソンによる「未公開・単独インタビュー」を中心に、ベケットの生い立ち(家族、ダブリンの学校生活、パリでの高等師範学校時代)、ジェイムズ・ジョイスとの親交、ナチ支配下におけるレジスタンス活動やゲシュタポからの逃避行を経て、40年代後半のパリに戻るまでが回想される。第2部は、ベケットの知人や関係者が、第二次大戦後の彼の活躍について語っている。『ゴドーを待ちながら』で不条理演劇の第一人者となり、ノーベル文学賞の受賞という光栄に浴してゆく彼の姿だけでなく、舞台で苦闘する演出家としてのベケット像が語られる。ポール・オースターやJ・M・クッツェーらも登場し、ベケット作品の影響について述べ、20世紀文学の巨匠の「遺産」について多角的な視座を提供してくれる。
(研究協力者 川島健)



共同利用・共同研究拠点「演劇映像学連携研究拠点」として認定

演劇博物館は、文部科学省の受託研究である2009年度「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」に採択され、「共同利用・共同研究拠点」として認定された。拠点名称は「演劇映像学連携研究拠点」である。これにより世界の演劇研究者・機関との演劇や映像をテーマとする共同研究の活性化を目指す。本館は、世界中の演劇映像資料を幅広く収集・蓄積してきた。そのいっそうの有効利用と成果の社会還元のために、以下の研究方向のもと、開放的で互恵的な研究交流を実現する。1. 他分野との協同による演劇映像文化環境の歴史的・社会学的研究の重視、2. 自然科学との連携による演劇・映像テクノロジーの研究の重視、3. 演劇・映像制作の現場との連携研究の重視、4. あらゆる言語芸術を一貫する普遍的なテキスト研究の重視。以上につき拠点が提案する研究事業への参加を募り、また自由な発想での共同研究プロジェクトを公募することになる。
(拠点リーダー 竹本幹夫)

EVENT
CALENDAR

2009年度第一回博士論文成果報告会

日時：7月23日(木) 13:00~17:00 会場：早稲田キャンパス26号館(大隈記念タワー)地下1階多目的講義室

タイムテーブル

- ①13:00~14:10 金 牡蘭(芸術文化環境研究コース GCOE研究員)
「われわれ」のアイランド—日本と植民地朝鮮におけるアイランド文学の〈移動〉
(筑波大学・2008年)
- ②14:20~15:30 神田裕子(日本演劇研究コース 研究協力者)
能と注釈書—その古典世界をめぐる—(早稲田大学・2009年)
- ③15:40~16:50 魏 名媛(東洋演劇研究コース GCOE研究員)
「中国近代劇成立期における日本新劇運動の受容—春柳社を中心に—」(金沢大学・2007年)

編集後記

ニューズレター第5号をお届けします。GCOEも3年目に入り、教育と研究の目に見える形での成果を多数発信して参ります。ご期待下さい。
(研究助手 森平崇文)

News Letter 第5号

2009年7月15日

編集：埋忠美沙 後藤大輔 鈴木辰一 崔柄珠 長嶋由紀子 村瀬民子 森平崇文

発行者：早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」

拠点リーダー 竹本幹夫

早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

TEL：03-5286-8110

URL：http://www.waseda.jp/prj-gcoe-enpaku/index.html